平成２６年度 学校経営計画に対する最終評価報告書

重点目標		具体的取組		主担当	実施状況の達成度判断基準	分析(結果と課題)及び次年度の扱い（改善策等）
1	県工スタンダードの実践を推進し、わかりやすい授業に努め、確かな学力の向上を図るとともに、教師の授業力向上に努める。	①	県工スタンダードを活用し、明確な目標に基づいた指導と評価を行うことにより、わかりやすい授業の実践につなげる。	教務課 各教科	生徒の授業アンケートにより、わかりやすい授業であり、授業に満足していると回答する生徒の割合で判断する。 Ａ　８５％以上 Ｂ　８０％～８５％未満 Ｃ　７５％～８０％未満 Ｄ　７５％未満	**最終評価（ Ａ ）** 生徒を対象とした授業アンケートを前後期(7･12 月)に実施した。その結果によれば、「先生の説明はわかりやすい」の回答割合は、前期 84.7%，後期 85.0%であった。また、「授業を受けて、知識や技術が身についた」の回答割合は、前期 85.3%，後期 85.1%であった。 本年度は県工スタンダードの活用２年目であり、「何を教えたか」から「どういったことが生徒に身に付いたか」といった教師側の授業に対する意識の変化が、生徒の知識獲得に対する満足感に繋がったものと考える。次年度も学力スタンダードの取組を推進する。
		②	生徒の主体的な学習を確保し，学習習慣を身につけさせる。	教務課 各教科	学校での補習や家庭での学習時間を１日１時間確保できているかどうかで判断する。 Ａ　ほとんど確保できた Ｂ　週に２～３回確保できた Ｃ　週に１回程度確保できた Ｄ　ほとんど確保できなかった	**最終評価（ Ｄ ）** 生徒対象の授業評価アンケートの結果によれば、「学校での補習を含め家庭において１日１時間以上の学習を行っている」に対する回答割合は、Ａ：8.0 %、Ｂ：12.2 %、Ｃ：22. １%、Ｄ：57.8 %であった。 自宅学習教材の工夫等により、学習時間を週に２～３回以上確保できた生徒の割合（Ａ＋Ｂ）は、前期 17.6 % から後期 20.2 %へと上昇したが、目標値を大きく下回った。今後、課題の出し方や家庭学習に対する意識付け、部活動単位での勉強会の実施等多方面での取組が必要と考える。
		③	教師個人及び各教科にて積極的に授業改善に取り組み、全体的な授業力の向上を目指す。	教務課 全教員	１年間の研究協議会や校内研修に参加した回数で判断する。 Ａ　３回以上 Ｂ　２回 Ｃ　１回 Ｄ　できなかった	**最終評価（ Ａ ）** 平均参加回数は 3.4 回であった。初任者や 20 年経験者研修等の基本研修に係る研究授業の協議会のほか、要請訪問の際の協議会、ＳＰＨ事業や専門高校における職業英会話力育成推進事業に係る研究授業の協議会等に積極的な参加者が見られ、他教科の授業を参観し協議に加わることで、教える技術について改善を図ることができた。次年度は、ＳＰＨ事業における育む資質・能力を研修の柱に据え、全教科にて連携した研究・実践を行い、学校全体で授業力の向上に向け取り組む予定である。
		④	授業の情報化及びわかりやすい授業に向けて、ＩＣＴ機器の活用を促進する。	学習情報課	教師一人当たりの１年間の利用数で判断する。 Ａ　５回以上 Ｂ　３回～５回未満 Ｃ　１回～３回未満 Ｄ　０回	**最終評価（ Ａ ）** 教師一人当たりの普通教室でのプロジェクタの利用回数は 9.1 回であった。本校では比較的ＩＣＴ機器がよく活用されていると言える。好調の理由として、プロジェクタが 2 台増設となったこと及びグループウェアを利用した貸し出しシステムを採用し、貸し出し手続きに煩わしさがないことが挙げられる。 今年度、5 教科から１件ずつ活用実践例を報告してもらい、それを全教員にフィードバックすることでＩＣＴ機器の活用を促進した。次年度も、実践報告をもとに利活用の促進を図る。

学校関係者評価委員会の評価	・学習時間も大切であるが、工業高校の特徴は「ものづくり」を学べることにある。「ものづくり」を通じた主体的な学びの育成といった視点からの学習への取組について検討をお願いしたい。 ・今後の授業改善では、「教員が教える」内容より、「生徒にどれだけ伝わったか」「いかに吸収してもらうか」「創造性を高めるには」といった視点で取り組んで欲しい。 ・学力は学校における柱である。子どもたちを学習に向かわせる工夫をお願いしたい。ＳＰＨの取組をその契機としていただきたい。
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善策	・ＳＰＨ事業にて育む資質・能力を規準に、特定の学科や教科にとらわれることなく、学校全体として、工業高校に相応しい学力向上に向けた「学習スタイル」の確立を目指し、教員研修を充実する。 ・自主的・継続的な学習習慣づくりを目指して、教務課が中心となり、教科ごと課題を工夫することによって、授業以外での学習に取り組ませる。

重点目標		具体的取組		主担当	実施状況の達成度判断基準	分析(結果と課題)及び次年度の扱い（改善策等）
2	校訓を掲げた学校づくりを進め、規範意識やマナーの向上、責任感の醸成を図り、将来の職業人としての意識の高い生徒の育成を目指す。	①	校訓を掲げることにより、一人ひとりの生徒の愛校心や帰属意識を高め、共通の理念のもと、将来の職業人に相応しい、規範意識や基本的生活習慣を身につけた生徒を育成する。	生徒指導課 各学年	生徒のアンケートにより、挨拶の励行に積極的に取り組もうと努力している生徒の割合で判断する。 A　９０％以上 B　８０％～９０％未満 C　７０％～８０％未満 D　７０％未満	**最終評価（ A ）** 生徒を対象としたアンケートを前後期(7･12 月)に実施した。その結果によれば、「努めている」、「概ね努めている」の回答割合は、前期 93%、後期 91%であった。運動部生徒が率先して挨拶が交わせるよう範を示してくれている。その影響もあり、概ね目標が達成されている。しかし、挨拶の仕方について「元気」「爽やかさ」に少し欠ける点がある。県工生としてプライドを持った挨拶を目指し、引き続き生徒会と連携し、部活動顧問の理解と協力を確保しながら、またＰＴＡと連携し保護者を巻き込んで学校全体で展開させていきたい。
					皆出席者の割合で判断する。 A　５５％以上 B　５０％～５５％未満 C　４５％～５０％未満 D　４５％未満	**最終評価（ A ）** 皆出席数は12月末現在で１年生 202 人(63 %)、２年生 207 人(66 %)、３年生 164 人(53 %)、全体 573 人(61 %)（昨年 508 人(54 %)）。遅刻者数は 12 月末現在で 2.3 人／日（昨年 1.9 人／日）であった。昨年に比べ、皆出席者数は増加したが、遅刻者数も増加した。ここ数年、遅刻者数が増加傾向にあることが危惧されるところである。「社会に一番近い学校」を自負する本校にとって、遅刻は、基本的生活習慣や自己管理能力の指標と捉える。時間に対する厳しい姿勢の定着は進路指導の基礎である。日々のショートホームルーム等を通じ時間に対する自己管理の徹底を図りたい。
			周辺美化活動や除雪作業等のボランティア活動や県工モノづくりワールド等の地域との交流活動を通して地域に貢献する意識を育てる。	総務課	生徒アンケートで、周辺美化活動(除雪活動を含)や地域との交流活動に積極的に取り組もうと努力している生徒の割合で判断する。 A　８０％以上 B　７０％～８０％未満 C　６０％～７０％未満 D　６０％未満	**最終評価（ C ）** 生徒を対象としたアンケートを後期(12 月)に実施した。その結果によれば、「思う」、「やや思う」の回答割合は、68%であった。この意識の低調さの主たる原因として、天候不良などにより周辺美化活動の実施回数が少なかったこと、また、除雪作業の実施についても２日のみであり、地域への貢献意識を育てる場面が少なかったことが挙げられる。 今後、地域貢献に対する意識が高まるよう、美化・除雪に限定した基準ではなく、「県工モノづくりワールド」等、各学科の特色を活かした地域貢献活動を含めて意識を問うものに改善したい。
		②	交通ルール等の遵守など、社会の一員としての自覚を高める。	生徒指導課 学年団	違反指導件数の減少の割合を目標とする。 A　前年比１０％以上の減少 B　前年比５％～１０％未満の減少 C　前年比０％～５％未満の減少 D　前年比増	**最終評価（ A ）** 県警本部発表の自転車違反件数は、累計 85 件(12 月末現在)で、昨年度同時期の 144 件に比べて 59 件、41 %の大幅な減少をみた。今年度は、並進、無灯火、二人乗りで違反件数のほとんどを占めていた。 来年度は、生徒会に加え、学年会も含めた協力体制を組み、広域指導を継続する計画である。「県工生」としての自覚と責任を刺激しながら生徒の自己コントロール力の醸成、規範意識の定着を目指す指導を継続する。

学校関係者評価委員会の評価	・就職してくる高校生には、学力はもちろんであるが、健全な勤労観と旺盛な向上心を期待している。引き続き校訓を掲げ、各種教育活動を通じ、心身を鍛える教育を推進していただきたい。 ・一部運動部の生徒に限らず、立ち止まって挨拶する生徒が確実に増えている。学校長の思いを受け入れ、実行しようとする生徒さんがたくさんいるこの学校の雰囲気に感動した。 ・美化活動や除雪作業等の取組も大切であるが、すでに取り組んでいる工業高校らしい各学科の専門性を生かした地域貢献や社会貢献をもっとピーアールし、発展させてほしい。
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善策	・自転車違反件数を規範意識の規準とし、従来以上に部活動をはじめ多くの部署が連携し、自転車乗車マナーの改善に取り組む。 ・知力、精神力、体力、社会適応力、キャリアアップ力からなる県工「人間力スタンダード」（仮称）を新たに策定し、教育活動の全体を通して、将来の職業人としての意識の高い生徒の育成を目指す教育を実施する。来年度は、全校生徒が元気で爽やかな挨拶を交わせる学校を目標とし、挨拶運動を通じ学校全体のモラルや規範意識の高揚を図る。

重点目標		具体的取組		主担当	実施状況の達成度判断基準	分析(結果と課題)及び次年度の扱い（改善策等）
3	資格取得や検定，各種コンテスト等に意欲的に取り組み，専門分野の技能向上に努め，進路意識を高めて，確かな進路実現を図る。	①	就職希望者が１００％内定するとともに，第１志望での進路実現を図る。	進路指導課 ３年学年団	就職希望者が１社目受験で内定した割合で判断する。 A　９０％以上 B　８５％～９０％未満 C　８０％～８５％未満 D　８０％未満	**最終評価（ A ）** １社目受験者 187 人中内定者 171 人、不合格者 16 人で、１社目受験で内定した割合は 91.4 ％であった。また、年内に学校斡旋希望者の全ての生徒が就職内定となった。 志望の動機が弱い生徒が不合格になるケースもあった。来年度に向けて、受験企業を決めるまでの間の個人面談を増やしたり、面接練習の機会を増やす等、希望する企業への入社意志や動機を明確化し強化する取組が求められる。
		②	専門分野の技能向上の一環として、課題研究の内容充実を図る。	工業７科	作品に対する高評価の割合で判断する。 A　９０％以上 B　８５％～９０％未満 C　８０％～８５％未満 D　８０％未満	**最終評価（ B ）** 来場者を対象としてアンケートを実施した。その結果、展示物（課題研究の内容）について、「よかった」: 87%、「普通」: 9%、「よくなかった」: 1%であった。工芸科、デザイン科の展示物への評価が他 5 科に比べて若干厳しめであった。 また、自由記述意見には、「どの作品にも 3 年間学んできたことが詰まっている作品ばかりだった」「生徒の作品から一生懸命さが伝わってきた」等の高評価のものが多かった。
		③	生徒の将来に役立つ資格取得に積極的に取り組む。	工業７科 教務課	認定者数（特別表彰＋ゴールド＋シルバー）で判断する。 A　６０名以上 B　５０名～６０名未満 C　４０名～５０名未満 D　４０名未満	**最終評価（ C ）** 全国工業校長協会ジュニアマイスター顕彰認定者は 48 名（特別表彰 5 名、ゴールド 18 名、シルバー 25 名）であり、昨年に比べ 8 名減であった。減少の主たる原因は、昨年度まで材料化学科の毒物劇物扱責任者の資格取得者全員に与えられていたポイントが、今年度より取扱責任者として関係する会社に就職する者にのみ与えられることに変更になったためである。 次年度以降、挑戦する資格の範囲を広め、学科ごと重点的に指導する資格について指導体制を充実し、合格者数の増加を図ることにより、認定者数の回復を目指す。
		④	全国レベルの各種コンテスト・コンクールにおいて上位入賞を目指す。	工業７科	［地区予選を経て、全国大会出場となる競技や大会］の場合は、大会出場の難易度で判断する。 A　全国大会でベスト１６以上の成績であった B　全国大会に出場した C　ブロック大会で入賞した D　県大会で入賞した	**最終評価（ B ）** 高校生ものづくりコンテスト （電気工事部門）　県大会　２位（電気科）　D （電子回路組立部門）北信越大会　６位（電子情報科）　D （化学分析部門）北信越大会　２位（材料化学科）　C 県高校生アメリカンフットボールロボットコンテスト　準優勝（機械システム科）　B 県高校生ロボットコンテスト　３位（科学工学同好会）　B
					［地区予選がなく、直接全国大会出場となる競技や大会］の場合は、出場した全国大会の成績で判断する。 A　全国大会でベスト８以上の成績であった B　全国大会でベスト１６以上の成績であった C　全国大会で初戦突破した D　全国大会に出場した	**最終評価（ A ）** 全国ソーラーラジコンカーコンテスト 優勝（機械システム科）　A 全国高等学校 IT 簿記選手権大会 優良賞（電子情報科）　D
					各種コンテスト、コンクールの難易度で判断する。 A　全国レベルのコンテスト等で入賞 B　全国レベルのコンテスト等で入選 C　県レベルのコンテスト等で入賞 D　県レベルのコンテスト等で入選	**最終評価（ A ）** 高校生技術・アイディアコンテスト全国大会 佳作（電子情報科）　B 石川の現代工芸展 現代工芸石川会理事長賞（工芸科）　C いしかわファッションウィーク デザイン画コンクール 会長賞（テキスタイル工学科）　C 愛鳥週間ポスターコンクール 全国入賞（デザイン科）　A デザインパテントコンテスト 理事長賞（デザイン科）　A

学校関係者評価委員会の評価	・課外活動として、部活動や資格取得に一生懸命取り組み、成果を出していることに敬意を表する。放課後の学習ノルマも含め、生徒にとって負担過重となることがないよう配慮して欲しい。 ・子どもは、「ものづくり」に取り組んで、ものづくりの苦労、やりがい、楽しさ、達成感、さらに「もの（人）を大切にする心」を育むことができた。これからも工業高校でしか体験できない「ものづくり教育」に期待する。
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善策	・進学・就職の両面における個々の生徒の進路実現をサポートし、一人ひとりに合った適切な進路指導の実現に向け、個人面談等の個別指導を一層充実する。 ・将来の工業技術者を目標に、「課題研究」における作品を最終ゴールに設定しより高い完成度を目指し、併せて適切な支援のもと各種資格や検定に積極的にチャレンジさせる。

重点目標		具体的取組		主担当	実施状況の達成度判断基準	分析(結果と課題)及び次年度の扱い（改善策等）
4	人間力を高めるための部活動や学校行事等、課外活動への積極的な参加を促し、たくましい体力と精神力、豊かな心を育む。	①	活発な部活動を通して、加入率と成果の更なる向上に努める。	生徒会課	各学年の部活動の加入率で判断する。 A　９５％以上 B　９０％～９５％未満 C　８５％～９０％未満 D　８５％未満	**最終評価（ A ）** 部・同好会加入率は、１年生 96.2％、２年生 97.1％、３年生 91.8％、全体95.0％で、概ねA評価を達成した。昨年度の課題であった3年生の加入率においても改善が見られた（昨年３年生 87.7%）。 また、男子はここ数年安定した加入率で推移しているが、女子は年によって加入率にばらつきがある。部活動の活性化こそ専門高校のエネルギーの発露と心得る。次年度も、年度当初から、担任、部活動顧問と協力して、積極的に加入を促す働きかけを行って行く予定である。
					県総体の成績等で判断する。（個人・団体あわせて） A　全国大会５部以上出場または総体順位男子２位以内 B　全国大会３部以上出場または総体順位男子４位以内 C　全国大会１部以上出場または総体順位男子６位以内 D　総体順位男子６位以下	**最終評価（ B ）** 県総体順位は男子第５位，男女総合 14 位（昨年：男子第３位，男女総合９位）。 全国大会出場は、男子バレーボール部、柔道部(個人１名)、陸上部(個人２名)、ボクシング部(個人３名）の４部。 昨年は男子が優秀校（３位以内）であったが、今年度は団体競技が振るわず５位にとどまった。男子の成績が落ち込んだ分、総合成績も落ち込んでしまった。次年度に向けて、男子団体競技の底上げと女子のより一層の成績向上を図る必要がある。
		②	学校行事に積極的に取り組む姿勢を大切にし、協調性や責任感など心豊かな生徒の育成を図る。	生徒会課	生徒のアンケートにより、行事に満足したと回答する生徒の割合で判断する。 A　９０％以上 B　８０％～９０％未満 C　７０％～８０％未満 D　７０％未満	**最終評価（ B ）** 生徒を対象としたアンケートを前後期(7･12 月)に実施した。その結果によれば、「思う」、「やや思う」の回答割合は、前期 94.8%、後期 89.7%であった。ほとんどの生徒が学校行事に対して積極的かつ自主的に取り組んでいた。次年度も生徒からの意見を取り入れながら、より内容的にも充実した学校行事になるよう生徒会リーダーを通じ働きかけていきたい。行事には、その企画・運営を通じて上級生から下級生に伝統が受け継がれてきた経緯があり、伝統の継承という点からも重点的な取り組みが求められる。
		③	歯科保健指導を通し、健康な生活を営むことができる能力の育成に努める。	保健課	歯科受診済の生徒の割合で判断する。 A　３０％以上 B　２５％～３０％未満 C　２０％～２５％未満 D　２０％未満	**最終評価（ B ）** う歯未処置者の受診完了率は、25.3%（86 名/340 名）に到達した。7 月時点では 11.5%と極めて低調であったが、学年団や部顧問と協力して、個別指導を実施した結果、受診完了率を 25 %に上げることができた。受診完了率は、健康への意識「早期発見・早期治療」の指標と捉える。次年度は、早い時期から保護者向けに歯科受診啓発の案内を配布し、更なる受診率の増加を目指したい。 全校生徒を対象とした学校歯科医による歯科講話により意識の喚起を図った。また、毎月の「保健だより」の発行により、インフルエンザなど感染症に対する情報提供と早期対応に努め成果をあげた。

学校関係者評価委員会の評価	・企業では、精神力と体力が大切である。部活動は成績も大事と考えるが、それ以上に精神力、忍耐力、体力を、高校生のときにしっかり鍛えておいて欲しい。 ・グローバル化の進展に伴い、いろんな人たちとのコミュニケーションが必要になってくる。それに備えて、人間力、特に社会適応力の育成に向けた取組を高校でも検討していただきたい。 ・歯科疾患と全身の病気とは密接な関係があり、病気予防、健康維持の観点から、歯科受診済率のアップは必須である。数値アップに向けた一層の取組をお願いしたい。
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善策	・好ましい人間関係の形成、学校生活の充実および意欲高揚に向けて、なお一層、部活動と学校行事の充実に向けて以下のことに取り組む。 生徒会が中心となって、全生徒が積極的・主体的に参加し、達成感や成就感を味わうことができる学校行事を工夫・企画する。 大会成績を部活動充実の重要な指標と捉え、成果が得られるよう競技力の向上を図る。併せて、女子運動部への加入促進を図る。